

【書 評】

## 道とロゴス —古代中国とギリシアにおける科学と医学—を読む

李 梁

一、

十五世紀末から始まった大航海時代によって東西航路が開通され、いわゆる「近代世界システム」という大きな物語の誕生を直接促された。本当の意味の世界史も文字通りそれによってはじめて成立しえ、グローバルな比較文明論もまたそうした歴史的な条件を背景にしてはじめて可能となったのである。たとえば、十八世紀西欧の啓蒙思想家だったライプニッツ（1646 - 1716）やヴォルテール（1694 - 1778）などを魅了させた中国文化が、誤解などによる要素が多いとはいえ、西欧、とりわけフランスで空前のブーム（*goûtchinois*）を巻き起こして相当思想的影響を及ぼしたことは周知の事実である。いわば、それが比較文明論の先縦となりえたのは、ヴァスコ・ダ・ガマ（1469頃 - 1524）によるインド航路発見以降、イエズス会士のザビエル（1506 - 1552）やマテオ・リッチ（1552 - 1610）を筆頭に、次々と日本や中国などにやってきた諸教派の宣教師による必死な努力のお陰である<sup>1</sup>。だが、そうはいうものの、ひとつの「学問分野」としての比較文明論は実はそう歴史が長くない。たとえシュベングラール（1880 - 1936）やトインビー（1889 - 1975）などの業績を取り上げて数えても、せいぜい一世紀ほどのものしかないのである。ちなみに、日本の場合となると、ちょうど今年暮れに、比較文明学会成立二十周年を迎える運びとなるのである。

それはともかく、ここ二十年近く、とくに前世紀の九十年代以降、比較文明の研究領域において、ある注目すべき現象が現れている。つまり、古代中国とギリシアの比較研究（Sino-Hellenic Studies）はかつてないほど脚光を浴び、その研究成果も次々と世に問われるようになってきた、という現象である<sup>2</sup>。高名なギリシア科学史家 G・ロイド卿（Sir.Geoffery Lloyd、ケンブリッジ大学名誉教授）と中国科学史家のネイサン・シヴァン氏（Nathan Sivin、ペンシルベニア大学教授）による共著『道とロゴス—古代中国とギリシアにおける科学と医学』（*The Way and the Word: Science and Medicine in Early China and Greece*, Yale University Press, 2002）は、その中でひとときわ光っている一点であるように思われる。

一般に、中国と西洋との比較文明や比較思想の研究領域に限っていえば、多少とも中国文明（科学）史または思想史に関する知識をもっている者であれば、直ちにジョセフ・ニーダム（1900 - 1995、李約瑟）やベンヤミン・ショウォルツ（1916 - 1999、史華慈）のすぐれた業績を想起するのである

う。事実、上述の現象は、直接または間接的に、彼らの問題提起と無関係ではないと言ってよい。ことに、いわゆる「ニーダムの難題」(Needham's Question)によって引き起こされた議論の熱は、今日に至ってもなお消え失せる様子がまったく見られないというのはその証であろう<sup>3</sup>。だが、それよりもまして、実はその現象の背後にさらに看過できぬ重大な要因が隠されていると指摘しておかねばならない。

それは、端的に言えば、ここ数十年來、欧米の思想状況の劇的変化によってもたらしてきた結果だといえよう。つまり、とくにここ二十年近く、欧米従来の東方学をはじめ、アカデミー界全般ではレヴィ・ストロースの構造人類学、とりわけM・フーコーの「知の考古学」を代表とする構造主義を嚆矢に、ポスト構造主義やポスト・コロニアル理論などといった方法論、認識論の革命的な更新による強い衝撃に晒され、その基本的方法論原理から言説まで根本的な変革を迫られていたのである。最近逝去されたE・サイード(1935 - 2003)による一連の論考はそうした経緯を最も象徴的に解き明かしていると言えよう。いわばフーコーの思想的影響を受けたサイードは、彼の著書『オリエンタリズム』(今沢紀子訳、平凡社、1993年)と『文化と帝国主義』(大橋洋一訳、みすず書房、2001年)において、十九世紀から二十世紀にかけて、主としてヨーロッパのアジア研究者(東方学者)によって生産され正当化された「オリエンタリズム」の帝国主義の本質を鋭く暴き出し、欧米の文化的ヘゲモニーを大きく動揺させたのである。興味深いのは、パレスチナ出身のサイードと同じく、そうした欧米の文化的ヘゲモニーへの挑戦または対決は多くはいわゆる第三世界出身の学者や思想家によって行われているという事実である。ともにインド出身で現在世界的に活躍されているP・チャテルジー(Partha Chatterjee)、G・C・スピヴァク(Gayatri Chakravorty Spivak)およびホミ・バーバ(Homi K・Bhabha)などの「サバルタン研究者」はその代表的な存在である。言うまでもなく、思想文化や歴史社会の研究において、そういった新しい方法論、認識論の有効性についてはまだ十分検討する余地があるが、しかしそれらによってもたらした欧米アカデミー界の構造的変革、換言すると、つまりヨーロッパ中心論の打破はアカデミー界だけでなく、その社会の文化思想界全体にも少なからぬインパクトを与えていたといわねばならない。たとえば、激しい議論を巻き起こしたM・バーナル(Matín Bernal)の『黒いアテナイ—古典文明におけるアジア・アフリカのルーツ』はその好個の例であろう<sup>4</sup>。その意味で、ヨーロッパ中心論からの呪縛をつねに自戒し、近代科学は単にギリシアだけでなく多元的な文化伝統の取捨融合による産物だとみなす『道とロゴス』も、そうした思想状況の劇変の一端を現している書物だといえよう。

## 二、

『道とロゴス』(以下、本書と記す)では、全六章に分け、それに序文と付録、年表、注、参考文献目録および索引などを加えて、延べ三四八ページの書物である<sup>5</sup>。その具体的な構成は整然として、まさに一目瞭然だと言ってよい。序文以下は、第一章「目的と方法」、第二章「中国科学の社会的・制度的枠組」、第三章「ギリシア科学の社会的・制度的枠組」、第四章「ギリシア科学原理

の討論」、第五章「中国科学原理の討論」、第六章「中国とギリシア科学の若干比較」、付録「中国宇宙論の進化」、とある。言ってみれば、本書は決して大部のものでもないし、また同類の著書にありがちな難解なタームが随所ちりばめられていることもなく、つとめて平易な言葉で分かり易く説いているという著者らの気配りがまず印象的である。

本書では、紀元前 400 年から紀元 200 年前後の凡そ六百年間の時代範囲を扱われている。それは、ギリシアの古典時代末期からヘレニズム時代をへて、ローマ帝政期の初期にあたる時期である。一方、中国では、春秋時代の末期から戦国時代や秦王朝をへてほぼ後漢までの時期をカバーしている。若し紀元前 500 年前後は K・ヤスパース (1883 - 1969) のいう世界文明の「枢軸の時代」だったとすれば、本書で扱う時代範囲はちょうど古代中国とギリシアという二大文明の爛熟期に相当するといえよう<sup>6</sup>。というのは、ヘレニズムからローマ帝政期にかけて、数学者ユークリッド、アルキメデス、アポロニウス、天文学者アリストアルコス、ヒッパルコス、地理学者エラトステネス、天文学者プトレマイオス、医学者ガレノスなどが活躍したように、それは事実上、ギリシアの学問の専門化または科学が確立された時期である。これに対して、中国では春秋時代中期から戦国時代(約紀元前 6 世紀から前 3 世紀末期)にかけて、いわゆる諸子百家が輩出したが、司馬遷の『史記』、三統暦(『漢書・律曆志』)、撰者不明の『九章算術』と『黄帝内経』、後漢の張仲景の『傷寒論』および近年相次いで発掘された馬王堆漢墓医書や秦漢の竹簡など天文学、数学および医学にすぐれた専門書が著らわれたように、中国文明の集大成はやはりこのような秦漢時代を待たなければならない。あたかも藪内清が指摘したように、この時代は「詳細にわたればいくらか時代の前後はあるが、大綱において、科学発達の様相やその年次においてギリシアときわめて類似している」という<sup>7</sup>。

この「きわめて類似している」時期を比較の対象に設定したというのは本書の独特な着眼点であり方法論上の特色だと言ってよかろう。なぜなら、それは、ただ単にそうした時代における史料の完全性、確実性のためだけでなく、またともに大きな政治的な変動を経た時代的背景が自然哲学、科学と医学の発展にどのような関連性を持ち、いかなる影響を及ぼしたのかを究明するのに恰好な対象材料が提供されているからでもある。

そして、本書におけるもうひとつ顕著な特色は文化的コンテクストを重視する社会史的手法の導入であろう。比較文明の研究には常に思いがけない落とし穴があるとよく言われている。それは、つまり今日の通念としての概念術語を時空とも違う文化的コンテクストをもつ事象に当てはめようとする際に生じがちな意味のずれや見当違いという危険性である。例えば、ギリシア思想における「四元素」理論や「原子論」の対置概念が古代中国には存在していないし、同じく古代中国の「陰陽五行」や「気」という思想概念もギリシア時代には見出せないのである。無理やりにそれらをパラレルに適合させたり、あるいは単純な概念比較を試みたりするのは誤解や混乱をきたすだけなのは明らかである。

本書では、そういうやりかたではなく、ひとまずそれら概念術語を生み出した自然環境(風土)と歴史社会の文化的コンテクストに立ち返って、その意味およびその史の変遷の様相を検証し、以っ

てそれらが各々の自然哲学や科学および医学の生成発展にどのように関連するかを明らかにし、さらに文化思想の歴史的発展の全過程を理解しようとするのである。こうして全くと言ってよいほど異質な文化的コンテクストをもつ古代中国とギリシアの比較研究がはじめて可能であり意味をなすであろう。本書の第二、第三章では多くの紙幅を割いて広い意味での思想関係の諸文献から多くの哲学や医学の概念術語テクニカルタームと定着するまでの言葉の意味を語源学的エチモロジに追求されているのはそのためである。ある見地からみれば、比較文明論の醍醐味は正にそういうところにあると言えなくもない。無論、それを成し遂げるためには比較の対象をなす双方の文明を同等に熟知しなければならない。本書はまさにそういう意味での完成度の非常に高い書物である。

### 三、

本書では、たとえば元素、原因、現象と実在、気、陰陽五行、公私の境界、医学思想、多元主義と異端思想、宇宙観と政治体制および身体との関連など実に多岐にわたって問題提起を行い討論を重ねられている。それらをここで一々整理することはとうてい不可能であるため、便宜的に、とくに重要と思う問題を二点ほど取り上げて吟味してみたい。

まず宇宙観をめぐる諸問題である。表面からみれば、古代中国にもギリシアの「表象と実在」というような対概念があるように見える。いわゆるマクロコスモス（大宇宙）とミクロコスモス（小宇宙）というのはそれである。しかし、ギリシアと決定的に異なっているのは、古代中国の場合、この両者の関係では後者は前者のミニチュアとして整然調和し相矛盾対立することはない、ということである。そもそも古代中国において、「天地四方、これを宇といい、往古來今、これを宙という」（『淮南子・齊俗訓』）ように、宇宙は空間とともに、時間を示す概念でもある。そこから、さらに自然や生命現象ないし政治倫理の意味合いが概念内容として加味されたのである。そうして、それぞれの機能からみれば、マクロコスモスとは「天道」あるいは「天地の道」への体認であって、ミクロコスモスとは「生命」、「性命」あるいは「人道」への体認である。「天道」を究める学問は「数術の学」といい、「生命」または「人道」を探求する学問は「方伎の学」という。言い換えれば、数術方伎の学こそ、古代中国の自然哲学、科学、技術（とくに医学）を内包する学問領域であったと言ってよい<sup>8</sup>。

ギリシアに比べれば、古代中国ではその自然哲学の最初の出発点からすでに違う道を辿ったのである。たとえば、数術方伎に関する最初の記録である『史記』の「日者列伝」、「亀策列伝」と「扁鵲倉公列伝」などに示されているように、古代中国の思想家達（investigators）が関心を抱いたのは自然や元素ではなく、「道」、「気」、「陰陽五行」のほうである。そもそも「道」、「気<sup>9</sup>」、「陰陽五行」といった概念は政治と倫理の概念であって物質または自然の概念ではなかったが、紀元前四世紀末頃からはじめて宇宙自然の生成原理や人間の生老病死を表す物理の概念として用いられ、さらに『呂氏春秋』においてそういう意味合いが一層敷衍されたことが認められるのである。

ともかく、秦漢以降、中央集権の専制王権政治を特徴とする文人官僚（士大夫）制度の確立にし

たがって、天人相関説、五徳始終説が示すように、古代中国人の宇宙観が政治や倫理の概念と結びれて益々国家政治の中で重要な位置を占めるようになったのである。逆説的であるが、それは、「気」や「陰陽五行」の思想が最初から政治にとってすぐれて重要な位置を占めているというより、基本的な概念として自然哲学、科学、とりわけ医学の中にも深く浸透していった事象の政治的な現われだったという方が妥当かも知れない。いわば、天道としての大宇宙は日月星辰や春夏秋冬の自然推移変化の如く整然とした秩序や法則があるように、小宇宙としての国家と個人（身体）もそのような法則に則ってバランスよく営まれなければすなわち破滅を招いてしまうのである。『黄帝内経・素問』における黄帝と岐伯との問答はそういういわゆる天人合一の思想を端的に表している<sup>10</sup>。

これに対して、ギリシアの思想家達はそれほど政治的影響力を持っていなかったとはいえ、その政治的発想や意味合いが宇宙観にも映し出されている。言い換えれば、ふたつの文明において宇宙観が等しく価値を担い、また国家と身体との対置関係としてマクロコスモスとミクロコスモスという概念が用いられたことは認められるものの、さらに一歩掘り下げていけば、両者における本質的違いがまた鮮明に浮かびあがってくるのである。

古代中国の場合、『国語・楚語下』にある「重黎絶地天通」という有名な故事に示されたように、一般に国家政事が巫占呪術の宗教神学から分離させられた後、現実の政治に超越的な力（天、上帝）からの介入がなくなりすぐれてリアリスティックになったと思われがちであるが、実際には自然天道と政事人道との相関関係は終始にして同一の基本的原理たる陰陽五行の思想によって秩序化され制度化されているのである。いわば「陰陽二元の気の情報運動を活用して、自然界の秩序を解明し、それを天時星暦として制度化し、統治権者が年時ごとに発する政令または教令というかたちを通して、天たる自然にかわってそれに帰順する代表者——天の命じた天子が、天下人民の社会生活を統治し規制するのである」<sup>11</sup>。この場合、宇宙は大文字の国家であって、宇宙と国家または個人はひとつの有機的な完全体であると考えるのである。このような天人思想に対して、古代ギリシアの場合、これといった最善の政治制度があるという認識は必ずしも皆がもっていることもなければ、また宇宙自然がどのような政治的構造に擬似させられるべきかということにもさほど興味を示さなかったのである。確かに、古代ギリシア人からも大宇宙と小宇宙との対応関係が政治秩序のレベルにおいて想定されていたが、しかし有機的で完全一体的な中国の場合と違って、彼らの宇宙観が実に多種多様だったのである。煎じ詰めて言えば、その原因はやはりギリシアの都市国家（ポリス）の複雑な政治形態にあると考えられよう。

古典時代においてギリシア文化の及ぶ範囲は古代中国よりずっと狭かったにもかかわらず、その政治体制は原始民主制（市民が直接立法に参加する）、寡頭政治、僭主制、独裁などのように、かえってずっと複雑な様相を呈しているのである。ときにたとえ同一のポリス内においても政治体制が絶えず変えられ、さらにそうした試行錯誤の中でさまざまな対立する政治思想とその実践行為が樽俎折衝を繰り返されている。そのゆえに、いわゆる道統（*orthodoxy*）や統一した世界観、つまり思想的権威を必要としなかったのである。ギリシアが古代中国との決定的な違いはまさにそう

いう点にあるといえよう。やや粗っぽい言い方をすれば、その影響は決して政治の世界にとどまらず、哲学、科学および医学など古代ギリシアの社会全般、さらに強いていえば、その後の西洋社会にとっても決定的な影響を与えたと言っても過言ではないだろう。

次に、これと関連して、本書でとくに強調されている自然哲学者および自然科学者の「社会的起源とその生計手段」という問題を一瞥してみよう。

社会的現象として、もし古代中国とギリシアと何か相似する点があるとすれば、それは恐らく学問の担い手たちまたは集団はたいてい貴族階層から来ているということであろう。もっともギリシアに比べれば中国の状況はより複雑だったのである。その象徴的な事象はやはり「士」の起源とその社会の役割をめぐる問題である<sup>12</sup>。いわば、春明時代晩期（すなわち孔子が活躍した紀元前5世紀前後）に入ると、「王官解紐」（教育の官学による独占の終焉）が決定的となるにつれ、「士」という階層が次第に現れていた。戦国時代になると、「士」は更に頻繁に列国の間を周遊し活躍の場がいつそう広げられたのである。合従連衡という成語故事はまさにそういう時代風景の激写である。ただ、「士」は身分的に自由でありながら、実際に君主や有力なパトロン「食客」として養われていたのはほとんどである。そういういわゆる「養士」の制度はギリシアと著しく対照的である。ギリシアの場合、ソフィスト、雄弁家、医者などの技術者はよほどの資産家以外では殆ど教師やスピーチライター及び医療行為者として生計を立てていたのである。著名なプラトンのアカデメイア（前388年創設）と斉の稷下学宮（前374年齊の桓公創設）では、その設立思想や運営制度においても教育内容また教育方式においても根本的な違いを最も典型的に体现していると言ってよい。すなわち、充実したカリキュラムの教育、自由活発な思考およびいかにライバルを論破するかなどという動機によって生まれたギリシアの多くの哲学や科学と技術の論著と違って、秦漢時代の自然哲学や科学思想などを代表する『呂氏春秋』や『淮南子』は上述した「養士」という主として政治的需要による集合的な産物だったのである。確かに、「士」は君主やパトロンの需要や呼びかけに備えるために、日頃各自の才知、方略および弁才を磨きお互いに切磋琢磨せねばならないが、その政治的リアリズムの故に、諸子百家時代の百家争鳴のような多様な思想体系や価値観が生み出されたものの、結局のところ、秦漢時代の士大夫官僚体制の枠組と儒学を核心とする国家イデオロギーの中に収斂されてしまったのである。古代中国の自然哲学、科学、医学をはじめとする技術の生成、発展、とりわけその応用においてどれを取ってみてもそういう政治的事情に大きく制約されていたのは実証済みの歴史的事実である。なぜ近代科学は中国で生み出されなかったのかというニーダンの難題を解くヒントはそういうところに隠れているかも知れない。

#### 四、

さて、蛇足かも知れないが、本書の書名についてひとこと贅言しておきたい。いわば、「道とロゴス」ほど古代中国とギリシアという二大文明のエッセンスを的確に表現するタームは見つからないであろう。「一陰一陽これを道と謂う。これを継ぐものは善、これを成すものは性」（『易経・繫

辞伝』) という通り、中国思想において、「道」とは相互循環的・相互補完的な陰陽という万物の生成原理によって推移する宇宙(自然)の法則を意味するものである。古代中国人が宇宙または自然を語る場合、「構造」(Structure)ではなく「道」を好んで使っていたのはそういう属性のゆえでもある。一方では、言表内容、説明、議論、法則、理性、論理、計算、比率等など実に多様な意味をもつギリシアのロゴス(λόγος)は、ローマ・ラテンの世界に入ると、キリスト教神学の色合いが加味され(『ヨハネ福音書』の冒頭にある「はじめにロゴスがあった、ロゴスは神とともにあった、ロゴスは神であった」という有名な文句のように)、ラテン語のverbum、さらに英語のwordという「破格」の訳語が当てられるようになったのである。「敢えてこの訳語を選んだ背景には、実在する世界の構造を解き明かす言葉(ロゴス)から、創造において世界を無から作り出す予言的・命名的言葉への転換がある」わけである<sup>13</sup>。このようなロゴスに比べれば、「道」はもっと完全的で有機的であると同時にまたより動的で澆刺的であると言えるかも知れない。つまり、「道」は上述したロゴスの訳語に示されたように、いわば言葉の転位(replace)によってはじめて得られたその重層的機能を最初から具有しているのである。「万物は有より生じ、有は無より生ず」、「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」(『老子・道德経』)や「天命これを性と謂い、性に率えばこれを道と謂う」(『中庸』)などはそれを端的に表している。このように、古代中国とギリシアでは、それぞれの自然哲学、科学および医学をはじめとする技術の生成発展がまったく違う道筋を辿ったのはそういう宇宙・自然の基本的構成原理への認識回路とその応用の違いに負うところが大きであろう。なぜそういう相違が生まれてきたのか、比較文明研究のねらいとその意義は正にそういった謎を解こうとするとところにあるといえよう。

最後に、あえて望蜀の念を言わせてもらおうとすれば、本書では周到な目配りがみられる一方、ある問題をとことんまで追及していく姿勢というか意欲というかやや弱いように思われる。たとえば古代中国の宇宙観について、主として秦漢時代の史料に依拠して説明を行われているが、『易経』や『左伝』を除けば先秦時代の史料又は近代以降出土の器物資料や文献史料に殆ど依拠しなかったため、やはりその全貌の再構築や根本的原理への理解に支障をきたしかねないのである。事実、古代中国の宇宙観と密接な関連をもつ「式」または「式占」に殆ど言及しなかったのはそれを現していると言わざるをえない。もっとも、これは本書の取り扱う時代範囲の限定と無関係ではないし、または比較研究における宿命制約であるかも知れない。その意味で、本書は専門の研究書というより新たな問題提起と方法論試行のためのパイオニアな成果だと言うべきだろう。とくに、その社会史的手法と視角は、これまで多くの科学書や医書に対する文献書誌学的研究における歴史のパスpekティブの欠如を補うものとしても特筆すべきであろう。

本書はその懇切な参考文献目録もあわせて十分一読する価値のある書物としてお勧めしておきたい。

1、厳格な意味の学術研究ではないが、最初の中国とギリシア（または西洋社会）との比較研究は今日に残されている多くの著書や書簡集などが示すように、大抵十六、十七世紀にアジアにやってきた西伊仏などの宣教師らによって行われたのである。まさにそういう知的雰囲気の中で、フランスの聖職者、作家でもあったF・フェヌロン (François Fénelon 1651 - 1715) はかの『死者の対話』(Dialogues des morts) の中にある架空のソクラテスと孔子との対話（といっても殆どソクラテスの一方的な開陳であった）が創作されたであろう。ちなみに、十八世紀の啓蒙時代における中国文化の西欧への影響については、代表的な数点として以下の著書に詳しい。Donald F. Lach, *Asia in the making of Europe*, (University of Chicago Press, 1977)；後藤末雄著、矢沢利彦校訂『中国思想のフランス西漸』I - II (平凡社、昭和44年8月初版)；榎一雄編集『西欧文明と東アジア』(平凡社、昭和46年7月初版)；Jacques Gernet, *Chine et Christianisme* (Trans. Janet Lloyd, *China and the Christian Impact*, Cambridge University Press, 1982)；鎌田博夫訳『中国とキリスト教～最初の対決』、法政大学出版局、1996年；耿昇訳『中国与基督教』、上海古籍出版社、2003年)；Virgile pinot, *La Chine et a Formation de L'esprit Philosophique en France* (1640 - 1740) (耿昇訳『中国対法国哲学思想形成的影響』、商務印書館、2000年・北京)；Etiemble, *L'EUROPE CHINOISE*, Paris, Gallimard, 1986 (耿昇訳『中国文化西伝欧州史』、商務印書館、2000年・北京)；張西平『中国与欧州早期宗教和哲学交流史』、東方出版社、2001年；張国剛ほか『明清伝教士与欧州漢学』、中国社会科学出版社、2001年。

2、例えば、その代表的な著書として以下の幾つかがあげられる。G・E・R・Lloyd, *Adversaries and Authorities: Investigations into Ancient Greek and Chinese Science*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1996) および同氏近刊予定の *Ancient Worlds, Mordern reflections: Philosophical Perspectives on the Greek and Chinese Science and Culture* (Oxford University Press, 2004: 3)；Roger T. Ames/ David L. Hall の合作による三部作：*Thinking through Confucius* (Albany: State University of New York Press, 1987)；*Anticipating China: Thinking through the Narratives of Chinese and Western Culture* (Albany: State University of New York Press, 1995)；*Thinking from The Han: Self, Truth, and Transcendence in Chinese in the Western Culture* (Albany: State University of New York Press, 1998)；Steven Shankmen and Stephen W. Durrant ed., *Early China/Ancient Greece: Thinking through Comparisons* (State University of New York Press, 2002)；François Jullien, *Le Détour et L'access: Stratégies du sens en Chine, en Grèce*, (Paris: Bernard Grasset, 1995. Trans. Sophie Hawkes, *Detour and Access: Strategies of Meaning in China and Greece*, New York: Zone Book, 1995)。ちなみに、現代フランス思想のトップランナーと言われている同著者に近刊予定の関係著書に *In praise of Blandness: Proceedings from Chinese Thought and Aesthetics* (Paula M. varsano trans. Zone Books, March, 2004) および *A Treatise on Efficacy: Between Western and Chinese thinking* (University of Hawaii Press, July 2004) がある。なお同氏の邦訳として『無味礼讓：中国とヨーロッパ哲学的対話』(平凡社、1997年)、「外(中国)から考える」『思想』No.896、1999年2月号および『道徳を基礎づける—孟子 vs カント、ルソー、ニーチェ』(講談社現代新書、2003)を参照せられる。

3、ジョセフ・ニーダムとB・I・シュウォルツの生涯と思想について、それぞれ Maurice Goldsmith, *Joseph Needham: 20th-Century Renaissance Man* (Paris: UNESCO publishing, 1995)、Paul A. Cohen / Merle Goldman ed., *Ideas Across Cultures: Essays on Chinese Thought in Honor Of Benjamin I. Schwartz*, (Harvard East Asian Monographs, 150. Harvard University Press, 1990) および「史華慈專輯」『記念李約瑟』(『世界漢学』第二期、北京・世界漢学雑誌社、2003年)を参照。なお、ニーダムは、『中国の科学と文明』(全12巻、思索社、1976年/1991年新版)の第二巻において、科学思想史の角度から中国文明と西洋文明に対する比較研究を通して、「科学革命はなぜ中国で起こらなかったのか」という「ニーダムの難題」を提起している。以来、それをめぐって今日に至ってもなお多くの議論を引き起こしている。たとえば、ネイサン・シヴァン教授の論文 "why the Scientific Revolution did not take place in china-or didn't it?" *Chinese Science*, 1982, 5 (後に *Science in Ancient China: Researches and Reflections*, Brookfield, VT: Variorum, 1995 所収) および劉鈍ほか編『中国科学史と科学革命：李約瑟難題及其相關問題研究論著選』(遼寧教育出版社、2002年4月)などはそれを表しているといえよう。ただ直ちに補足的な説明をせねばならないのは、この問題提起はニーダムが先鞭をつけたのではなく、実は二十世紀の初期から中国内外で議論されていたことである。その代表的な議論として何よりもまずマックス・ヴェーバーによる一連の宗教社会学の比較研究、とくに1920年に彼が『宗教社会学論集』のために書いた序言を取り上げられよう。なお、1915年在米の中国人留学生によって創刊された『科学』の創刊号で「説中

国無科学之原因」と題する論説が掲載され類似の問題提起をすでに行っていたのはその証である。

4、1987年から1991年にかけて、マーチン・バーナルは、彼の四巻からなる大著*Black Athena: The Afroasiatic Roots of Classical Civilization* (Rutgers University Press, 1987) と*Black Athena: The Archaeological and Documentary Evidence* (同上出版社、1991) の前二巻を公刊し、欧州中心論へ果敢な挑戦を挑んだ。ちなみに、バーナル氏は英国ユダヤ系出身で現在米コネル大学教授、天才的な古代文字学者、言語学者として知られているが、そもそも彼は中国近現代思想史の専門家でもある。彼には、「劉師培と国粹」(Liu Shih-p'ei and National Essence, Charlotte Furth ed., *The Limits of Change: Essays on Conservative Alternatives in Republican China*, Harvard University Press, 1972 / 1976) や『1907年までの中国社会主義』(*Chinese Socialism to 1907*, Cornell University Press, 1975) などの中国関係の専門著書がある。上述の物議を醸し出した著書群も彼のそういう知的背景と無関係ではないだろう。

5、『中国学術』総第九輯(2002年1月、北京・商務印書館)に「中国、希臘之科学和医学的比較研究」と題するシヴァン自らによる本書の概略的な紹介がある。

6、Karl Jaspers, *The Origin and Goal of History* (Yale University Press, 1953), Chap. 1を参照。

7、藪内清『中国文明の形成』、岩波書店、1974年、274頁。

8、当該領域における最近の優れた研究成果は李零『中国方術考』(北京・東方出版社、2000年4月)および『中国方術統考』(北京・東方出版社、2000年10月)がある。

9、中国思想の根底を成している気の概念の成立とその歴史的推移について最も包括的な研究成果は小野沢精一ほか『気思想』(東京大学出版会、1978年3月初版、2001年8月第二刷)である。中でもとくに戸川芳郎氏執筆の「原初的な生命観と気の概念の成立一般周から後漢まで」(後に同氏『漢代の学術と文化』、研文出版、2002年10月所収)は精確な概説として示唆に富んでいる。なお、石田秀実『中国医学思想史』(東京大学出版会、1992年7月)、加納喜光『中国医学の誕生』(東京大学出版会、1987年5月)および坂出祥伸『中国思想研究：医薬養生・科学思想篇』(関西大学出版部、平成11年9月)においても、気の概念の重要な一側面をなす「気の医学」について立ち入った討論が行われている。

10、その一例として次の一節があげられる。「心者、君主之官也、神明出焉。肺者、治節出焉。肝者、將軍之官、謀慮出焉。胆者、中正之官、決斷出焉。…凡此十二官者、不得相失也。故主明則下安、以此養生則壽、歿世不殆、以為天下則大昌。主不明則十二官危、使道閉塞而不通、形乃大傷、以此養生則殃、以為天下者、其宗大危、戒之戒之。」

11、戸川芳郎「後漢期における気論」、前出『漢代の学術と文化』17頁。

12、「士」は貴族の出身なのか農民の出身なのか、それとも古代の文武官吏からの転身なのかをめぐって学界では未だ見解が分かれているようである。代表的な見解は徐復観「士」義探源(同氏『兩漢思想史』第一卷、上海華東師範大学出版社版、2001年)、余英時『士與中国文化』(上海人民出版社、1987年)を参照すべし。

13、神崎繁「ロゴス」『新・哲学講義』①ロゴス その死と再生、岩波書店、1998年、223頁。